

リレー
エッセイ

今年度もやります！
リレーエッセイ！
昨年度同様、エッセイを伝えた職員が
テーマバトンを決めて
次の職員へつないで
リレーしていきます。



「私の野望」

「野望」とは…大それた望み。さて、どうしたものか…では、小さな野望なら1つ。ここ10年ほど、扶養の範囲内で細々と仕事をして参りました。気が付くと、絵に描いたような中年太り。3ヶ月前の入職日、ワンサイズアップのスーツを購入するも、はち切れんばかりの上着とスカートのホックが止まらない状態で辞令を頂きました。そこから、規則正しい日々が過ぎ3月のらん卒業祝いの式で再びスーツの出番です。何んということでしょう、上着もスカートもスルッと…しかしながら、まだまだズボンパンパン。そうだ、びつとが始まる！みんなと一緒に歩いて泳いで、私もこっそり健康なシュッとしたおばさんになるのだ！応援よろしくをお願いします…

らん 三門留美

次のテーマバトン

「至福のひと時」



「もし生まれ変わったら…」

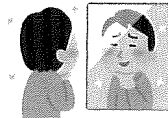


このタイトル「もし生まれ変わったら」を聞いて、私もそのようなことを考えられる年齢になったんだなあ～とちょっぴり寂しく思いました。

いろいろと生まれ変わりたいと思いますが、やはりもう一度自分に生まれ変われたらいいですね。

今まで失敗、後悔をしてきました。それを生かしたら、自分の人生がどれだけ変わるのだろうかと思うと見てみたいものです。

でも、一番、自分自身をわかっているので変わり映えしないかもしれませんけど…



とも 相馬正幸

次のテーマバトン

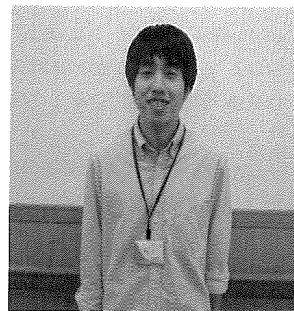
「小さな幸せ」

りとるの新しい仲間たち

～職員紹介～



初めまして、4月に入社した平原周です。
僕の好きな事は、きかんしゃトーマスのDVDを観ることと本を読むことです。
好きな食べ物は、マカロニグラタンです。
みんなでいきるの皆さんこれからお願いします。



りとるらいふ通信

(社福) みんなでいきる
障害福祉事業部りとるらいふ
発行日：2018年5月

ゴールデンウィークもあっという間に終わり、新年度から1ヶ月が経ちました。少しずつ新しい生活にも慣れてきたでしょうか？最近気温も高く天気の良い日が多くなってきて、お散歩が気持ちいいですね！ それでは、りとるらいふ通信5月号をお届けします(´▽`)



「とも」が開所しました！！



4月2日月曜日に、「生活介護事業所とも」が開所となりました。
1階は、車椅子の方や日中穏やかに過ごしたい方を中心に、定員20名でご利用いただける生活介護事業所として、2階は障害福祉事業部の事務所として運用が始まりました。障害福祉事業部としては3か所目の建物となり、これから多くの皆様にご利用いただけるよう、開所に先駆けて竣工式と内覧会を開催しました。
内覧会ではたくさんの方からご来場いただき、とも施設内を熱心なご様子でご覧いただくことができました。



現在福祉サービスを利用されている方はもちろん、これから学校を卒業される皆様にとっても、安心して地域で暮らせるための事業所として、そのお手伝いができるよう取り組んでまいりたいと考えております。
どうぞよろしくお願いいたします。





「お花見に行ってきました！」

～にこ～

みなさんこんにちは！にこの小林です。あつという間に新年度が始まり、桜の季節になりました。ここでは春休み中から4月にかけて高田公園へお花見に行ってきました。今年は咲くのが早く、新学期が始まって学校帰りに行った際にはもう葉桜でした・・・が、屋台はすずり！たくさん屋根に目を輝かせ、それぞれ食べたいものを買って大満足の様子でした♪今年は唐揚げが大人気で、一人の子が買ったその匂いにつられたのか気付けばみんな唐揚げを購入していました（笑）ぜひまた来年も行きましょう！



「今年度のきらの取り組み」

～きら～

新たに4名のご利用者様をお迎えし、心機一転、今年度の生活介護事業所きらがスタートしました。

これまで行ってきた、課題、清掃、さをり織りなどの日課を大切にしながらも、それらにとらわれることなく、スポーツ活動や余暇などを組み合わせながら、いろいろな個性を持った利用者様お一人一人に合った日中の活動の過ごし方を提供してまいります。

机に向かうことが苦手…、一人で集中して仕事をしたい、みんなとわいわい過ごしたい、など、利用者様のニーズも様々です。お一人お一人の個性、強みを生かして充実した1日を過ごせるよう職員一同、日々お手伝いさせていただきます。

きらでは5月から放課後ディサービスも開始します。ますます楽しく、笑顔あふれるきらになっていくことを楽しみにしています。



「春休みのイベント」

～らん～

春休み期間中は調理イベントや新年度頑張ろう会&卒業式を行いました。調理イベントは「ポップコーンチョコバー」を作りました！鍋に牛乳とマシュマロを入れて温め、ヘラを使って焦げないように真剣に回していました。おやつ時間にみんなで「頑張って作ったからおいしい！」や「また作りたいね」と言いながら食べました。

新年度頑張ろう会&卒業式では、子どもたちが自主的に考えてボーリング大会やインタビューを企画しました。チーム戦でのボーリング大会では、味方の応援をする声やストライクを喜ぶ声が多く聞かれました。その後の卒業式では小学部や中学部、高等部を卒業する人に賞状やメダルを作り、今までの感謝の言葉を添えて贈りました。贈り物をもって喜び子どもたちを見て、企画した子どもたちも喜んでいました。



「Mさんのこと」

障害福祉事業部りとるらいふ 副事業部長 片桐 友紀

平成30年4月。社会人となり、また大学を卒業し福祉職として働いてから18年目となった。これだけの間、福祉職をしているとたくさんのご利用者様、ご家族、関係機関の方々とのお会いがあった。きつと、長い間福祉職に携わっている人は、思い出や反省込めて「忘れられないケース」があるのではないかなと思う。私にとっては、福祉職1年目に出会ったMさんがその中の一人だ。今回のコラムではMさんのことを書いてみたいと思う。

平成12年4月。私は医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）として仕事を始めた。勤務していた病院は病床数200床に満たない比較的小さな病院で救急医療終了後の治療や療養を目的に入院されている方がほとんどであった。そのため相談援助の内容については在宅での介護や転院等の退院援助が主であり、複数回または長い期間を通じて関わりを持つことが出来るケースは数少なかった記憶がある。

Mさんは3障害のある50代の女性だ。日中は通所施設で働き、家庭状況の理由から自宅以外の施設で支援を受けながら生活されていた。基礎疾患もお持ちであり、毎月の受診に加え、状態が悪化すると定期的に入院を繰り返していた。Mさんのケース担当を受け持たせて頂いたのは入職後数か月後のことだったと思う。前任からの長期間に渡る、また地域の多職種との連携に伴う業務は初めてで不安もあった。

平成12年といえば、介護保険制度がスタートした年。Mさん担当の前任者は同じ部屋にいたもののケアマネジャーとしての業務に奔走されていた。直接の指導者もいなかったが、それでも自分に来ることとして、①過去のケース記録を徹底的に読む ②外来（入院）時には必ず会ってお話をする ③分からないことは前任者や関係機関、主治医に聞く という3つを心掛けていた。関わり始めのころはなかなか顔と名前を覚えてもらえなかった。外来で会っても「うーん、名前何だったっけ？」と言われ続けたが、ある日、「金子さん！」と満面の笑顔で呼びかけてもらった時は本当に嬉しかったことを覚えている。

毎月の外来受診の際に「入院はしたくないな」と自分の意志を伝えるMさん。医師から食事制限や軽運動指導に加え、「おやつたくさん食べているんじゃないの？」と聞かれると「食べたような、食べないような・・・」と答えてみたり、受診後に「Mさん、この後どうするの？」と私が聞くと「(病院の前の)コンビニでパン買って食べるよ。食パンならいいよね？甘くないし。病院に来た時の楽しみなんだ」とMさん。一新米ワーカーであった私は「そっか、Mさんの楽しみなんだよね」と二人で笑ったことも数知れず。今思うと、障害特性のようなものだったのかもしれないが、愛らしく、何故か人を引き付ける笑顔と言葉に私は魅力を感じた。

普段はいつもニコニコとしているMさんであったが、一旦入院すると、「より管理され、自由度が少ない生活」が苦痛であることや不安や寂しさが重なって「家で家族

と暮らしたい」と訴える。ケース記録には、離れて暮らさざるを得なかった糸空線が残されていた。様々な事情で家族と離れて暮らしているのにも関わらず「家で家族と暮らしたい」とつづやくMさん。入院中少しでもMさんの気が紛れればと思し、病室に会いに行ってお話をしたり、「家で暮らしたい」と訴えるMさんの言葉をただ受け止めるだけのことしか出来なかった。

Mさんの支援を担当させて頂き3年が過ぎた頃、Mさんは何回か入院をした。同じように病室訪問をしていたが何となくこれまでの入院と比べ元気がなく、表情も乏しくなっているような感じがした。ある日、訪問から帰ったら（その時はMSWと地域の高齢者を訪問するワーカーを兼務していました）、「金子さん、Mさんが亡くなった」とナースステーションから連絡が入った（今思うと、医療従事者や家族以外の人間を臨終の場に立ち会わせて頂いたことは、Mさん、ご家族、主治医はじめ病院関係者の理解があったからこそのも、と感謝している）。入院中はベッドに入ったままでの会話であったので分からなかったが、既に静かに眠っているMさんの脚はこれまでのふくよかなMさんの姿からは想像もつかないほどに痩せて細くなっていた。Mさんの少しだけ冷たくなってしまう脚をさすり、出棺のお見送りもさせてもらった。身内でもなく、友人でもない方の死に立ち会ったこと、涙を流したこともこれが初めてだった。「Mさんにもう会えない」という悲しみはもちろんであるが「Mさんの想い」に「蓋をかぶせてしまったような」反省の涙でもあった。

仕事を初めて3年目、24歳頃のことである。Mさんを見送り、「自分はMさんに何が出来たんだろう？」と思った。様々な困難や不安を抱えながらも「自分らしく」生きようとしているMさんに私自身が色々な気づきの視点を教えてもらったように思う。

それまでは在学中も障害福祉分野の学びはせずに関心もほとんどなかったが、Mさんとの出会いをきっかけに障害のある方の地域生活支援に興味を持ち、ボランティアから始めた活動が今の仕事へと繋がった。

Mさんの死から約15年。当時のコンビニは既になく、その前を通るとMさんの笑顔やエピソードが思い出される。駆け出しで右も左も良く分からない新米ワーカーにMさんは自身の生活を通して様々なことを教えてくださった。Mさんが思っていたような暮らしを支えることが出来るような地域や人を作っていくことが、せめてものMさんへの恩返しになれば、と思う。

「自分らしく生きる」ということを支援することの原点を教えてくださったMさんはいつまでも私の心に残っている。